

春山の危険性

2012年5月9日

周南山岳会 坂口仁治

白馬岳で6人遭難死

- 全国から登山者が集まるゴールデンウィークの北アルプスで、今年も遭難事故が起きた。この時期、3千メートル級の高山の天気は急変しやすい。亡くなったのは、いずれも60歳以上の男女だった。
- 長野県警によると、白馬岳を目指した6人は、北九州市の小児科医岡崎薫さん（75）の呼びかけで集まった医師を中心とするパーティー。
- 3日から2泊3日で、長野県小谷（おたり）村の柵池（つがいけ）から白馬岳を往復する予定だった。3日夜は柵池ヒュッテに宿泊。4日午前5時半、全員が弁当を2人前ずつ持って白馬岳へと向かった。
- 岡崎さんと外科医井上義和さん（66）は登山の経験が豊富だったらしい。福岡県医師会の野田健一副会長は「井上さんはアフリカのキリマンジャロなど国外の登山経験が豊富。岡崎さんは日本アルプスなどをよく登っていた」と話す。

- 6人が3日夜に泊まった山小屋「樽池ヒュッテ」付近は4日午前中には晴れ間がのぞき、ほぼ無風。
- 一方、白馬岳山頂の山小屋「白馬山荘」によると、山頂付近は4日昼過ぎから天候が急変し風が強まり、吹雪になった。
- 午後5時頃には風速が20メートルを超え、午後6時には氷点下2～3度を記録した。
- 「下山した人の話では、2500メートル以上の尾根は風も強く、雨交じりの湿った雪だったらしい。テントの支柱が曲がった人もいた」と、4日夜の天候を語った。
- 死因はいずれも低体温症だった。日本海側からの強風が吹き込み、登山家の間でビバークには不向きな場所として知られる。6人全員が下着とシャツの上にジャンパーや雨カッパの軽装だったという。年齢的に体力もなかったのだろう。
- 三国境の近くにはビバークの際に風よけとなるくぼみがあり、誰かが知っていれば、助かった可能性もある」と、残念がった。

- 『山は危険と感じたら、すぐ引き返す勇気が必要だ』といつも言っていた彼が、まさか山の事故に遭うなんて……と絶句した。
- この時期の山は「春山」と呼ばれ、冬と春が同居していると言われる。天候が変わりやすい上、山頂付近には雪が残っている場所も多い。装備が不十分なケースもあり、県警は「北アルプスを甘くみてはいけない。5月末まで冬山登山の装備は不可欠」と注意を呼び掛ける。
- 五つのザックにはそれぞれ、春・夏山用の羽毛ジャケット、防風機能のある冬山用ズボン、保温機能のある登山用下着、予備の手袋、500ミリリットル入りの水3本などが入っており、約15キロの重さだった。簡易コンロも二つあったという。6人で使用したとみられ、発見時に遺体に巻き付いていたツェルト（簡易テント）1点も回収した。
- 6人は発見時、防水透湿性素材の雨ガッパに綿のズボン、ウールのシャツなどの薄着だった。降籟隊長は「冬山用のズボンを持っていたが、全身の装備は冬山に耐えられない。加えて、低体温症で判断が鈍り、吹雪になって着替えられなかったのではないか」と推測した。

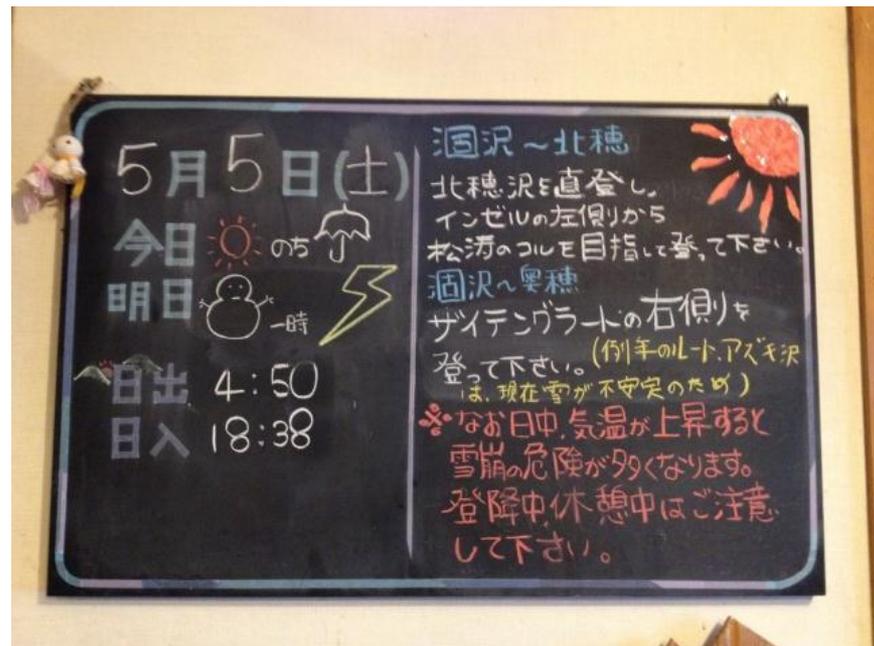
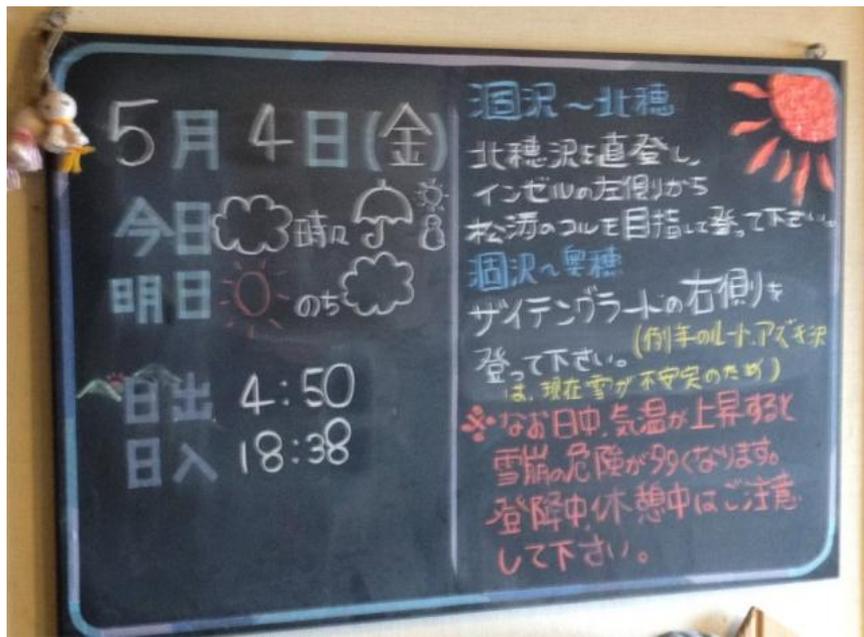
涸沢岳6人遭難、71歳男性死亡 5人は救助

- 長野地方気象台によると、4日に気圧の谷が通過した影響で、この黄金週間の北アルプス山域の天気は変わりやすく、一時的に吹雪にもなった。
- 吉野さんら6人は3日朝に長野県の上高地から入山し、4日は涸沢岳を經由して穂高岳山荘を目指した。だが吹雪のため身動きがとれなくなり、同日午後7時ごろ、携帯電話で同山荘に連絡し、救助を要請した。
- 6人はまもなく救助されて同山荘に収容されたが、吉野さんが**低体温症**で心肺停止状態になり、4日夜に亡くなった。残る5人も低体温症になっているが、命に別条はないという。
- 6人の夏山登山歴は4～45年で、**亡くなった吉野さんは登山歴45年のベテラン**だったという。ヒマラヤの8000メートル級の山に登り、同連盟が開いた海外登山の研究会で講師を務めたこともある。同連盟の菊沢真一郎理事（62）は「穏やかで仲間の面倒をよく見る人だった。今回も、**体調を崩した仲間の救出活動をしようとして亡くなったのではないか**」と語った。

奥穂高岳で、男性2人が滑落 死亡

- 3人は6日昼ごろ、ザイルでつながった状態で、穂高岳山荘を目指して尾根を歩いていて、ザイルを岩角に引っかけて滑落。最後尾の里さんが自力で尾根に戻り携帯電話で家族に連絡した。
- 3人は3日に岐阜県側の新穂高から入山し、5日に下山予定だった。悪天候で日程が大幅に遅れ、6日は予備日だったという。
- 一方、奥穂高岳山頂付近で6日午後5時ごろ、**悪天候で動けず簡易テントでビバークしていた**大阪市淀川区東三国3丁目、会社員前原英敏さん（55）が**山岳救助隊に救助**された。前原さんは手足に軽い凍傷。
- 前原さんは3日、長野県の上高地から1人で入山。5日午後3時頃、奥穂高岳山頂に到着したが、悪天候で身動きが取れなくなり、**テントを張ってビバークしていた。**前原さんは奥穂高岳に約20回の登山歴があり、**冬山の装備**だった。

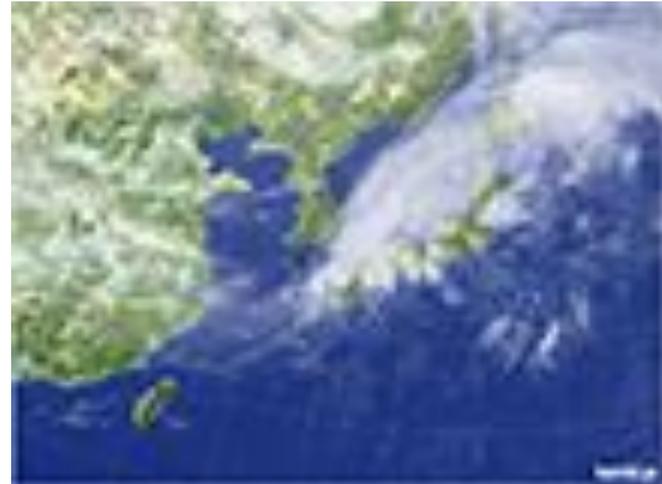
- 4日の北アルプス周辺は、北日本に進んだ低気圧の影響で、風が強く吹き、また低気圧の後ろから流れ込んできた寒気の影響で、2000～3000メートル級の高い山は、みぞれや吹雪になっていたと想像される。
- 春山で発生する遭難事故の多くが、みぞれや吹雪、また寒さによる凍死などが原因となっている。
- 山の気温は、1000メートル上がるごとに6℃前後下がり、地上の気温が高くても、高い山ではこの時期、まだ氷点下に下がる事が多く、低気圧や寒気の影響で、雪や吹雪に見舞われることは、珍しくない。
- この時期に、北アルプスのような3000メートル級の高い山に軽装で行くのはある意味、非常に危険な行為とも言える。
- 涸沢岳の遭難に関しては、天気予報がそんなに悪くなくても、山では天候が急変し遭難する可能性があるというのが正しいのではないかと思われる。
- さらに言えば、涸沢での天気予報がそれほど悪くなかったのも、それが遭難に繋がった可能性もある。



今回の5月4日に関しては、3日や6日に比べると、まだマシな天気図や天気予報だった。涸沢小屋付近では、遭難日の4日夜より、5日日の夕方からのほうが荒れていて、6日は大荒れだった。

実際に有用だった情報は、寒気が入って大気が不安定という情報だったのではないかな？

中部山岳地域において5/4は荒れ模様でまとまった降雪あり、5日以降も不安定な天気が続くという予報で、6日の落雷も予測されていた。



日本海と三陸沖の2つの低気圧の影響で、山陰～北陸や東北北部・北海道では雨が続き、関東でも雨が降ったりやんだりの天気となった。北日本の太平洋側では特に記録的な大雨となり、山田市（岩手）などで24時間雨量が観測史上最高となった。

寒冷障害

直腸温度が35度以下になると寒冷障害、最悪の場合凍死する。
(通常37度ある体温が奪われる。凍傷は軽度の寒冷障害)

1. 特徴

- ①体が震える
- ②細かい動きがしにくい
- ③歩行困難（足がもつれた状態）
 - ・疲労による歩行障害とは違うが、見分けが付きにくい
- ④普段と違う言動がある

2. 対策

- ①風、雨を避け、濡れた衣類を早めに着替え、乾いた暖かい衣類での保温に努める。
- ②天然素材・吸湿速乾素材の使い分けや併用を考える
 - ・多少湿っても暖かい天然素材（ウール）の良さ
 - ・新素材（ヒートテック、シヤルト）の汗を溜めない良さ
- ③炭水化物を含んだ温かい食事をとって体温の上昇をはかる。
 - ・休憩の都度、口に運べる行動食を用意
- ④体の放熱を防ぐための装備を準備(例)
 - ・[リキューテート\(50g\)](#) @500~600円/[ツイルト\(250~500g\)](#) /ごみ袋等

低体温症

体温低下により、生命維持に大切な諸臓器（心臓、脳、神経、筋肉等）が機能異常に陥った状態。（直腸温度が35度以下の状態）

低体温症は遭難事例の紹介も少なく、詳しい実態が知られていない。

区分	意識・受け答え		ふるえ	中心体温（肛門）
前兆	正常	ゆっくり歩けば大丈夫	軽い	正常～35℃
軽症	受け答えはまとも よろめく	介護されながら下山（自力歩行困難） 足を交差させて転倒（機能障害） ザックを下ろさずに座ったまま。 着替えを面倒くさがる	強い	35℃～33℃
中等症	受け答えが変だ 記憶がおかしい （普段と違う言動） （普段と違う言動）	ろれつが回らなくなる 正常な判断能力なし 左手が動かない。目が真暗 胸が苦しい。頭が痛い	低下	33℃～30℃
重症	錯乱・支離滅裂	暑いと言い出す。 意識もうろう状態 肉親の名前を呼ぶ「おとうちゃん、おかあちゃん」	停止	30℃～15℃
	応答しない 昏睡 仮死（医師でも死と誤	瞳孔散大・腱反射消失	なし	